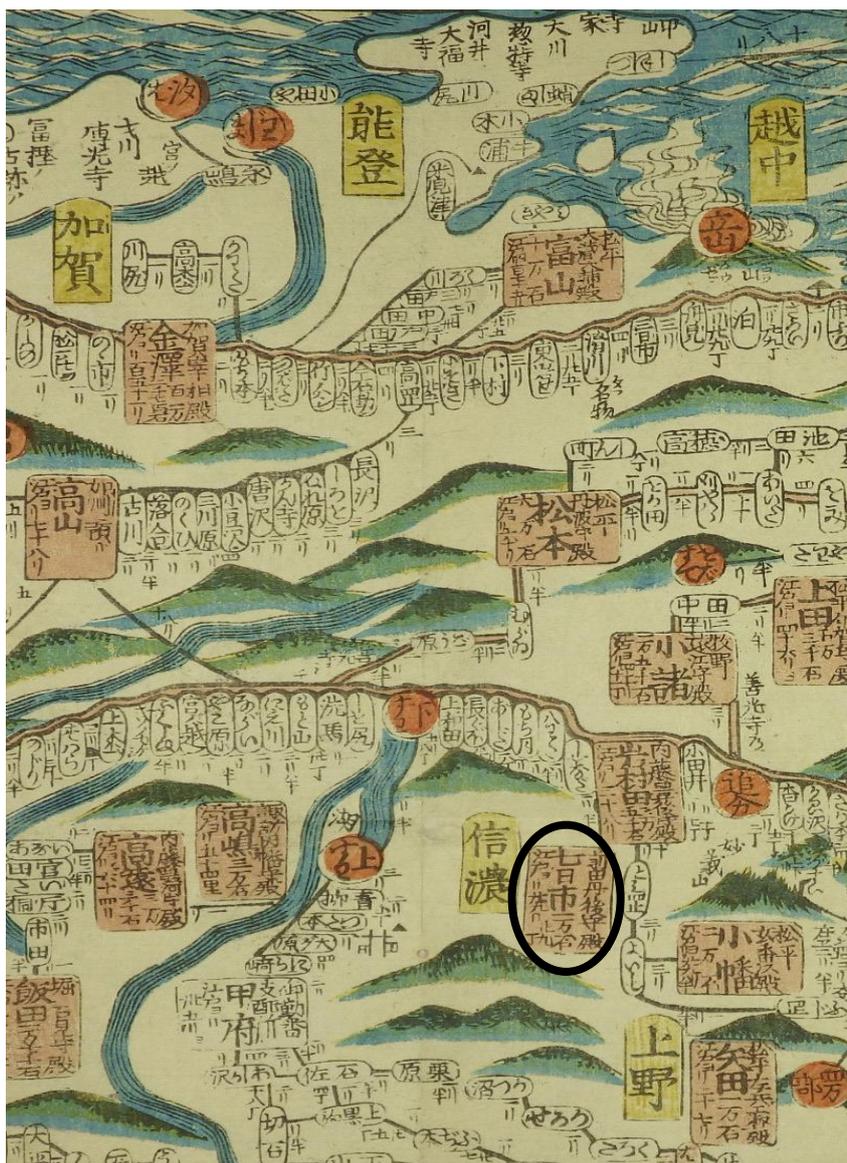


平成29年度春季展

七日市藩と加賀藩



「大日本早見道中記」(部分)(21.2-156)

平成29年4月28日(金)～6月25日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

はじめに

寛永16年(1639)、加賀藩主3代利常が隠居して、嫡男光高が家督を継ぎました。次男利次が富山藩、3男利治が大聖寺藩を、加賀藩からの分知によって立藩しました。

一方、上野(こうずけ)の七日市藩(現在の群馬県富岡市)は、加賀藩主初代利家5男の利孝が立藩しました。利孝は、若くして江戸の芳春院のもとで養育された後、2代将軍秀忠の小姓に召し抱えられました。大坂の陣では秀忠勢に加わり、いわば旗本として行動しました。元和2年(1616)に七日市藩を興しますが、これは加賀藩からの分知ではなく、幕府からの新知による立藩でした。しかしながら、この後も加賀藩からの財政援助を受けるなど、七日市藩と加賀藩との繋がりがあったことが、加賀藩側の史料からうかがえます。

加賀藩主4代光高の代になると、利孝の子孫が加賀藩に召し抱えられるようになりました。利孝3男の寄孝は前田大膳家を、利孝の孫にあたる誠明(のぶあきら)と孝效(たかのり)は、それぞれ前田兵部家と前田式部家を興しました。3家は人持組として小松御城番などを歴任しました。

本展示では、加賀国と上野国という遠く離れた地にあった両家の関係を中心に、文書・絵図で紹介します。

1. 七日市藩の誕生

文禄3年(1594)、金沢で誕生した利孝は、慶長9年(1604)から江戸の芳春院に養育されました。その後、2代将軍秀忠の小姓に召し抱えられました。同18年、従五位下大和守に叙任され、元和2年(1616)、幕府から上野国甘楽(かんら)郡内に1万石を与えられ、七日市村に陣屋を設置しました。以降、歴代藩主は、駿府城・大坂城の加番役などを勤め、一度も移封されることなく、明治維新まで存続しました。利孝は、外様の前田家の出自ながら、幕府の側近くに仕えました。いわば、譜代色の濃い存在だったといえます。

(史料1)「三壺聞書」6下(「加州大守利長公御世継之事」部分)(16.28-13 ㉞)

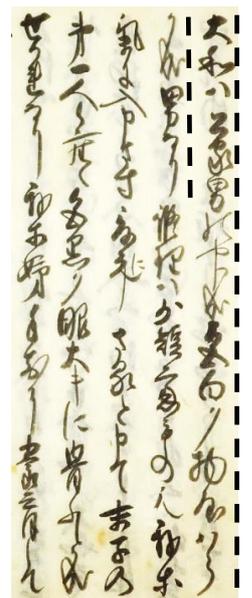
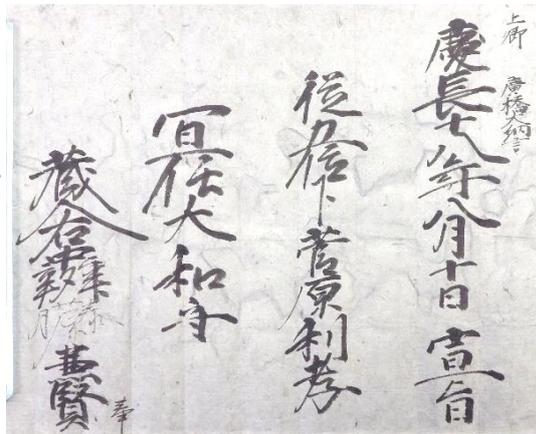
加賀藩主2代利長が自身の後継者について、浅野長政や蒲生秀行などと相談した内容の一部です。大和(利孝)・修理(利家3男の知好)・さる(猿千代。後の利常)の人物評価をしています。利長は、利孝について、「公家男のやう成、色白ク物やはらか成男なり」と語ったと記されています。

(史料2)「口宣案写」

(前田大膳家文書)

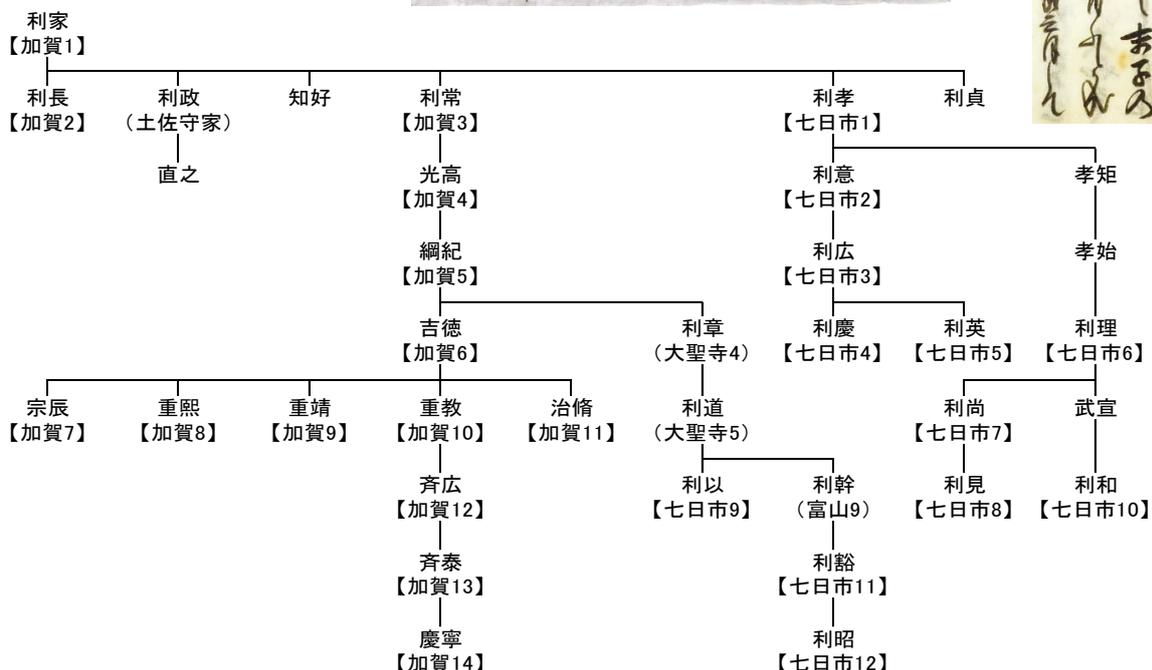
江戸で小姓となった利孝は、慶長18年(1613)、従五位下大和守に任官されました。

(史料2)



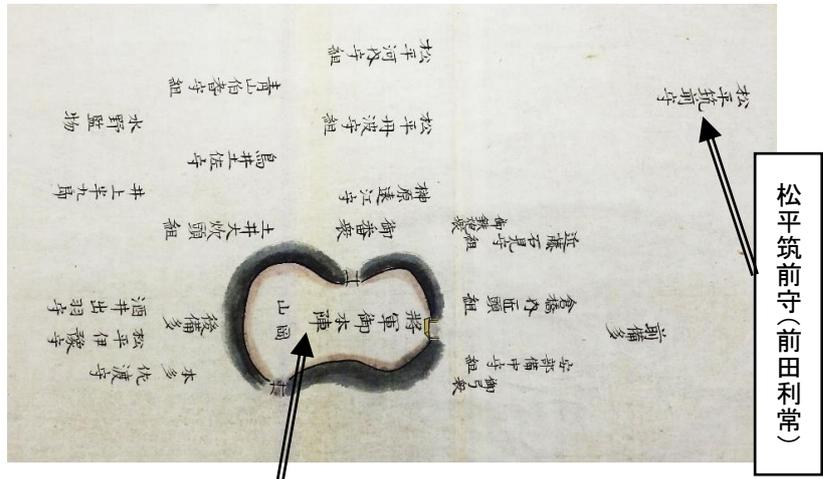
(史料1)

<加賀藩・七日市藩系図>



大坂の陣で、利孝は將軍秀忠の軍に属しました。その際、幕府から1,000人扶持と加賀藩から2,000人扶持を与えられました。慶長19年(1614)の冬の陣では、秀忠勢は大坂城東南方面の岡山口に布陣しました。翌20年の夏の陣も同様に岡山口に布陣し、秀忠勢は豊臣方の大野治房と戦い、利孝は首5つを挙げました。

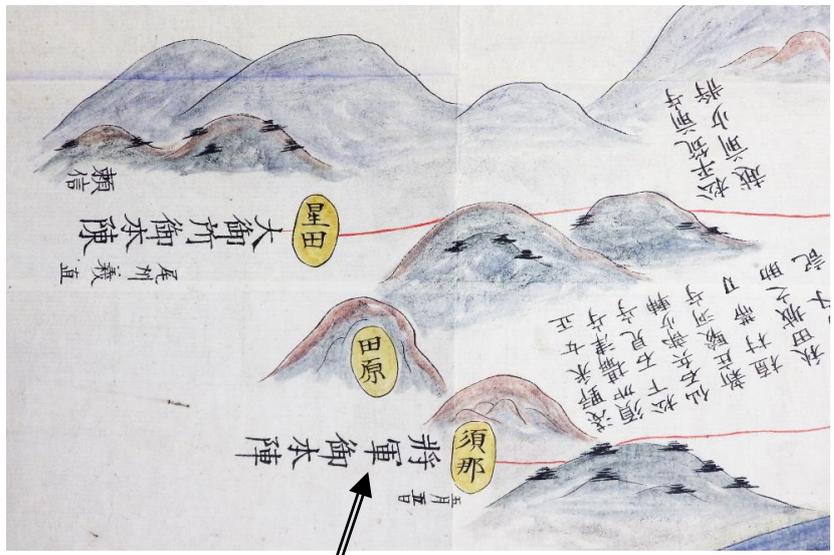
この戦功によって、元和2年(1616)、利孝は七日市藩を立藩したといわれています。



(史料4)「大坂冬御陣図」(大坂城東南方面)(16.51-55)
利孝は、岡山口(現、大阪府大阪市)の「將軍御本陣」に属しました。

夏浪華再乱之節、從軍セラシ先備二
加り軍功アリ、此時神君(徳川家康)方俸禄千口、
微妙公(前田利常)方二千口、都合三千口ノ軍糧ト云

夏浪華再乱之節、從軍セラシ先備二
加り軍功アリ、此時神君(徳川家康)方俸禄千口、
微妙公(前田利常)方二千口、都合三千口ノ軍糧ト云



(史料5)「大坂夏御陣之図」(大坂城北方面部分)(16.51-54)
利孝は、須那(現、大阪府四條畷市)から進軍する「將軍御本陣」に属しました。

(史料3)「四家前田家譜」2(部分)
(16.19-1②)

2. 七日市藩と加賀藩

七日市の地は、金沢とは遠く離れています。しかし、利常・利孝兄弟より始まる両藩の関係は続いていきました。加賀藩側の史料からは、七日市藩の誕生後、加賀藩から現米を拝領されたこと、両藩の初期の江戸屋敷が近郊にあったことなどが確認できます。

<七日市前田家>

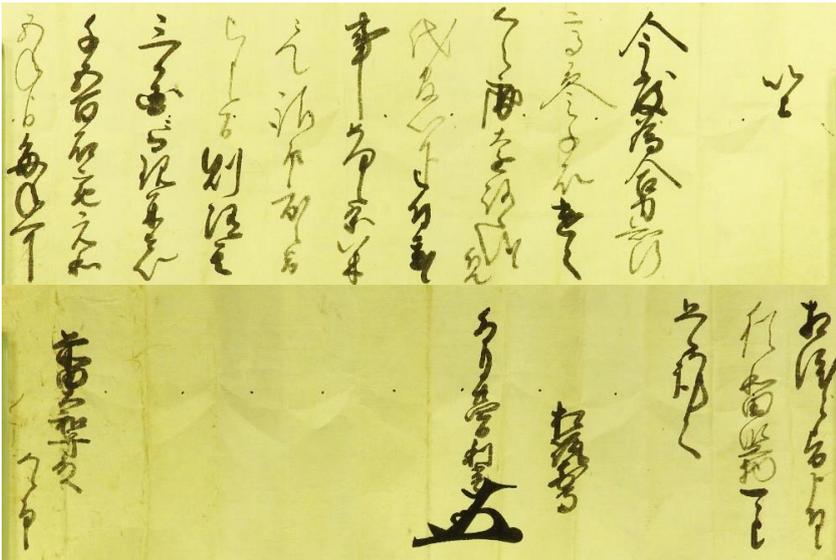
歴代藩主	生没年	相続・任官・役職
1 利孝 (としたか)	文禄3年(1594)生 寛永14年(1637)没	慶長18年(1613)、従五位下大和守。元和2年(1616)、立藩。
2 利意 (としもと)	寛永2年(1625)生 貞享2年(1685)没	寛永14年(1637)、相続。万治3年(1660)、従五位下右近大夫。 駿府城御加番・大坂城御加番。
3 利広 (としひろ)	正保2年(1645)生 元禄6年(1693)没	貞享2年(1685)、相続。 大坂城御加番。
4 利慶 (としよし)	寛文10年(1670)生 元禄8年(1695)没	元禄6年(1693)、相続。
5 利英 (としふさ)	元禄2年(1689)生 宝永5年(1708)没	元禄8年(1695)、相続。
6 利理 (としただ)	元禄13年(1700)生 宝暦6年(1756)没	宝永5年(1708)、相続。正徳3年(1713)、従五位下大和守。同年に丹後守。 駿府城御加番・大坂城御加番。
7 利尚 (としひさ)	元文2年(1737)生 寛政4年(1792)没	寛延3年(1750)、相続。宝暦6年(1756)、従五位下大和守。天明元年(1781)、丹後守。 駿府城御加番。
8 利見 (としあきら)	明和元年(1764)生 天明6年(1786)没	天明2年(1782)、相続。同3年、従五位下右近将監。同6年、大和守。 駿府城御加番。
9 利以 (としもち)	明和5年(1768)生 文政11年(1828)没	天明6年(1786)、相続。寛政7年(1795)、従五位下大和守。 駿府城御加番。
10 利和 (としよし)	寛政3年(1791)生 天保10年(1839)没	文化5年(1808)、相続。同年、従五位下大和守。 大坂城御加番。
11 利裕 (としあきら)	文政6年(1823)生 明治10年(1877)没	天保11年(1840)、相続。同年、従五位下大和守。同14年、丹後守。 大坂城御加番。
12 利昭 (としあき)	嘉永3年(1850)生 明治29年(1896)没	明治元年(1868)、従五位下。同2年、相続。同18年、正五位。同25年、従四位。

(史料6)「本多家古文書等」2(部分)(16.34-58 ②)

元和元年(1615)、加賀藩家臣の本多政重が、父である幕閣の正信に宛てたとされるもの。内容は、利常が直之(利政嫡男。後の前田土佐守家)の江戸下向を画策していたことが書かれています。利孝と同様に、直之を将軍秀忠の小姓に登用してほしいと願い出ています。直之は、芳春院唯一の男孫であり、未だ嫡男の無かった利常は家督争いを懸念しました。

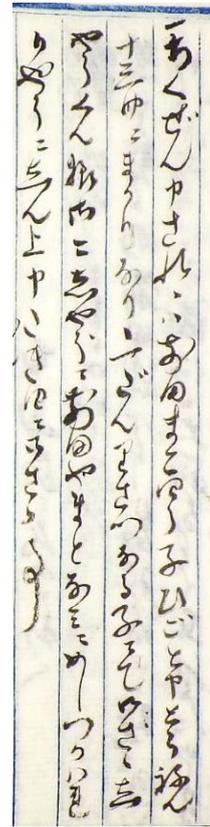
(史料7)「前田利常書状」(前田大膳家文書)(加工済)

元和4年(1618)頃に利常から利孝に宛てたもの。利孝は合力知行3,000石を拝領しましたが、米で与えてほしいと申し出たところ、現米1,500石ずつ毎年与えられることになりました。



(史料7)

(史料6)

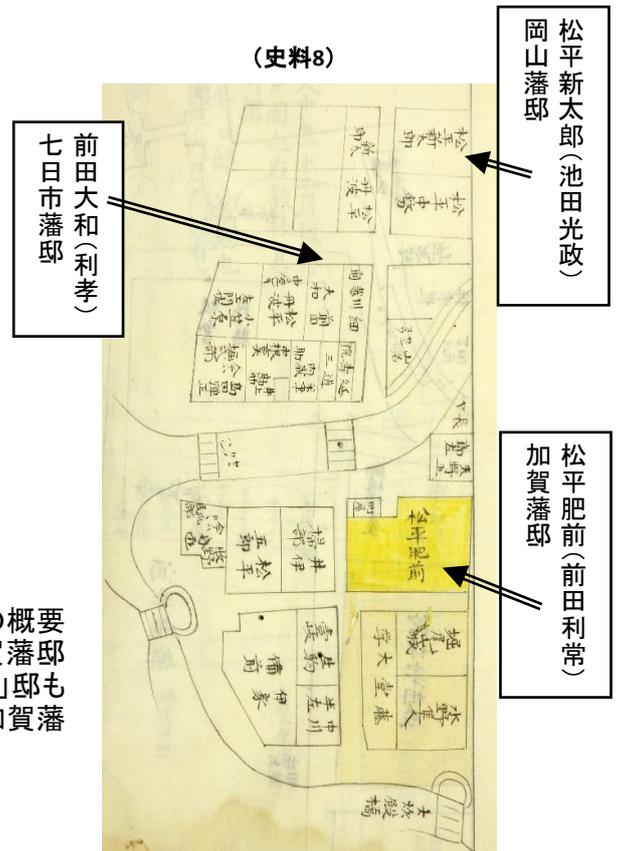


「ちくぜん(前田利常)申され候ハ、前田ま(四郎)利政(子ひ)前田直之」と申、とうねん十三・四まかりなり候、一だんりさいなる子にて御さ候、しやうくん様(徳川秀忠)御こしやう二、前田やまと(利孝)な三めしつかはれ候やう二、しん上申たき由二御さ候事

以上
 今度為合力知行
 高参千石遣之
 令候処、遠路之儀一付て、
 代官以下被付置候
 事如何候条、米
 二て請取度候旨
 被申候間、則隨其
 三ヶ国二而現米を以
 千五百石宛、元和
 五年方毎年可
 相渡候旨申付候、
 猶和田監物可申候、
 恐々謹言

松筑前守
 卯月廿四日 利光(前田利常)(花押)
 前田大和守(利孝)殿
 人々御中

(史料8)



(史料8)「東邸沿革図譜」前(辰口の寛永8年項目部分)(16.18-128 ①)

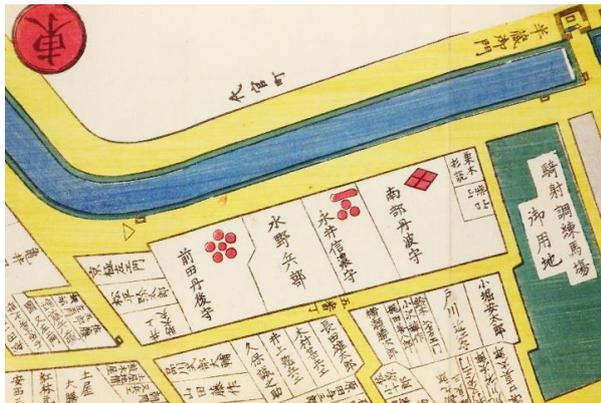
文政6年(1823)成立の富田景周の著で、江戸の加賀藩邸の概要が記されています。辰口邸の項目に、寛永8年(1631)の加賀藩邸周辺の大名屋敷図が描かれており、七日市藩の「前田大和」邸も見られます。翌9年に辰口の岡山藩邸からの出火によって、加賀藩邸・七日市藩邸は共に焼失しました。

(史料9)「三壺聞書」11
 (「加賀少将光高公御逝去之事」部分)
 (16.28-13 ⑬)

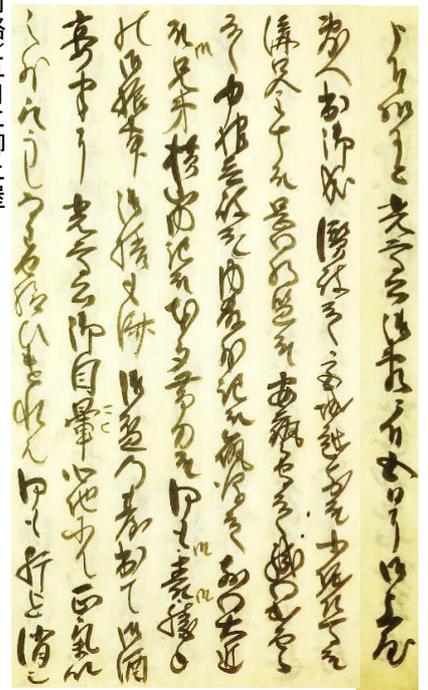
正保2年(1645)4月5日、光高は辰口上屋敷に幕閣の酒井忠勝を招いて酒宴を催しました。広島藩主の浅野光晟(みつあきら)(正室は利常の娘)などが集まりました。「前田右近殿兄弟」とは、七日市藩主2代利意と後に旗本となる前田孝矩であると考えられます。この酒宴の最中に光高は倒れ、急死しました。

(史料10)「東都割絵図」
 (「東都番町大絵図」部分)(13.9-143 ⑥)

幕末の江戸番町の絵図で、江戸城半蔵門前に「前田丹後守」(11代利豁)として、七日市藩上屋敷が見えます。



(前略五日に御上屋敷へ出御成、讃岐(酒井忠勝)殿・宮城越前(和甫)殿・小堀左馬(正春)殿・溝口金十郎(政勝)殿・岡田将監(善政)殿・安芸守(浅野光晟)殿・織田出雲(高長)殿・中根吉岐(正盛)殿・内藤外記(正重)殿・筑後殿・前田右近(利意)殿御兄弟・横山内記殿・本多帯刀殿、何も御表御勝手手の御振舞、御膳も済、御盃の台出て御酒宴半に、光高公御目量心地にて正気以外取うしなわせ給ひけれん(後略)



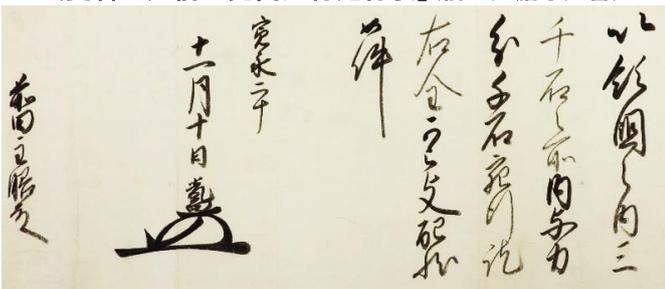
(史料9)

3. 利孝の子孫

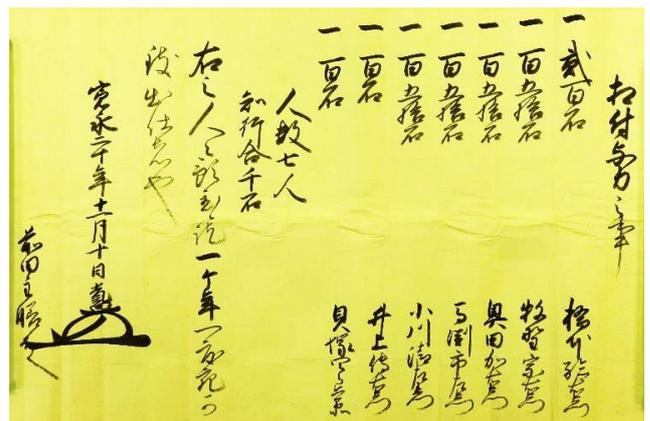
七日市藩主初代利孝の子孫の中には、金沢に来て加賀藩士になった者もいます。前田大膳(監物)家・前田兵部家・前田式部家の3家は、人持組に属し、若年寄や小松御城番などを勤めました。

また、加賀藩・七日市藩と幕府を繋ぐ仲介役となった旗本の前田孝矩は、利孝の次男です。利意の娘の恭(やす)姫は、加賀藩主5代綱紀の養女となって、加賀八家の長尚連(なおつら)の正室となりました。

(史料11)「前田光高知行宛行状」(前田大膳家文書)



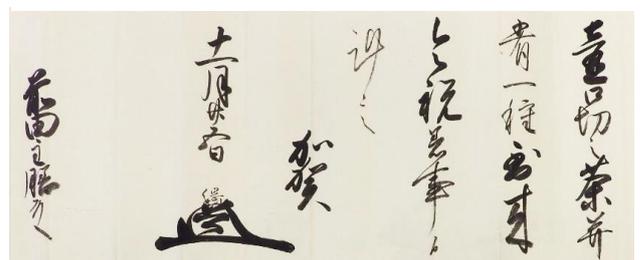
(史料12)「与力預置状」(前田大膳家文書)



(史料13)「前田光高礼状」(前田大膳家文書)



(史料14)「前田綱紀礼状」(前田大膳家文書)

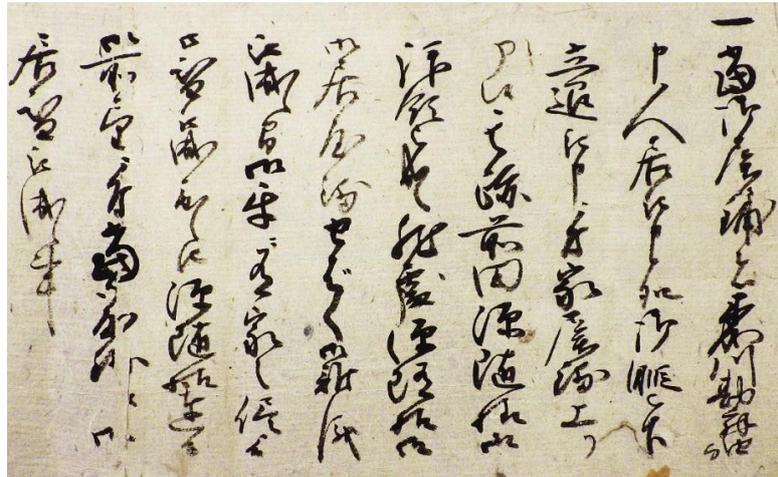


(史料15)「両御屋敷請取覚」(上屋敷部分)(前田大膳家文書)

享保15年(1730)に記されたもの。当初、大膳家の金沢での居屋敷(上屋敷)は、奥野市左衛門屋敷近くに拝領した後、前田対馬守家4代孝貞の屋敷地を経て、浅野川沿いの小橋町に移りました。

下屋敷は、高岸寺近く(芳斉町)に拝領することを許されますが、利常死去後に大衆免村(森山町)に移ったとされています。

一、当御屋敷者、森川勘解由与
 申人居被申候処、御暇被下
 立退被申二付、家屋鋪上り
 申候、其跡前田源随(孝貞)様御
 拝領被成候、然処源随様御
 御居屋鋪せばく、御難儀
 被成候間、御互三有家之俣二而、
 御替被成度候由、源随様達而
 御所望三付、当御屋鋪江御
 居替被成候事



<前田大膳家>

当主	生没年	相続及び役職
1 寄孝 (よりのり)	寛永6年(1629)生 元禄12年(1699)没	寛永20年(1643)、召出。 魚津在住を勤める。
2 察孝 (あきたか)	延宝5年(1677)生 享保3年(1718)没	元禄13年(1700)、相続。 定火消を勤める。
3 孝言 (たかのぶ)	元禄2年(1689)生 寛延2年(1749)没	享保9年(1724)、相続。 定火消・小松御城番・御奏者番を勤める。
4 孝恭 (たかやす)	享保元年(1716)生 天明2年(1782)没	寛延2年(1749)、相続。 小松御城番を勤める。
5 道孝 (のりたか)	元文5年(1740)生 寛政5年(1793)没	天明3年(1783)、相続。 小松御城番を勤める。
6 孝亮 (のりあきら)	宝暦11年(1762)生 文政9年(1826)没	寛政元年(1789)、相続。 小松御城番・若年寄・御近習御用を勤める。
7 孝成 (のりしげ)	寛政元年(1789)生 文政10年(1827)没	文政9年(1826)、相続。 小松御城番を勤める。
8 孝連 (のりつら)	文政元年(1818)生 明治3年(1870)没	文政10年(1827)、相続。 小松御城番・今石動等支配・寺社奉行・富木在番を勤める。
9 孝央 (のりひで)	嘉永元年(1848)生 没年不明	慶応4年(1868)、相続。

<前田兵部家>

当主	生没年	相続及び役職
1 誠明 (のぶあきら)	明暦3年(1657)生 享保8年(1723)没	延宝6年(1678)、召出。 奥御奏者番・若年寄を勤める。
2 孝起 (たかおき)	元禄15年(1702)生 明和8年(1771)没	享保8年(1723)、相続。 定火消・江戸御留守居・御近習御用・若年寄・御家老役・小松御城番を勤める。
3 孝博 (たかひろ)	宝暦6年(1756)生 天明3年(1783)没	安永元年(1772)、相続。 定火消・小松御城番を勤める。
4 純孝 (すみたか)	宝暦12年(1762)生 天保12年(1841)没	天明4年(1784)、相続。 定火消・小松御城番・御奏者番・寺社奉行・公事場奉行・若年寄・御家老役を勤め
5 孝義 (たかよし)	文化2年(1805)生 天保3年(1832)没	天保2年(1831)、相続。 御側小將を勤める。
6 孝事 (たかこと)	文化6年(1809)生 弘化4年(1847)没	天保3年(1832)、相続。 定火消・小松御城番・公事場奉行・御家老役を勤める。
7 孝享 (たかひさ)	天保7年(1836)生 安政5年(1858)没	弘化4年(1847)、相続。 小松御城番を勤める。
8 孝友 (たかとも)	天保10年(1839)生 (没年不明)	安政5年(1858)、相続。 定火消・小松御城番・御奏者番を勤める。
9 以孝 (もちたか)	安政4年(1857)生 没年不明	相続年及び役職不明。

<前田式部家>

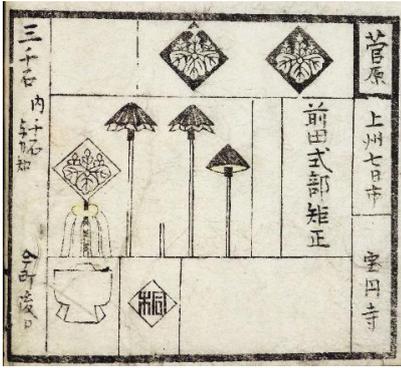
当主	生没年	相続及び役職
1 孝效 (たかのり)	延宝4年(1676)生 正徳2年(1712)没	貞享2年(1685)、召出。 小松御城番を勤める。
2 矩豊 (のりとよ)	元禄9年(1696)生 明和8年(1771)没	正徳3年(1713)、相続。 小松御城番・御算用場奉行・御預地方御用・御近習御用・公事場奉行を勤める。
3 孝慈 (たかのり)	享保15年(1730)生 天明7年(1787)没	明和8年(1771)、相続。 小松御城番・今石動等支配・若年寄を勤める。
4 孝始 (たかもと)	寛延3年(1750)生 文政5年(1822)没	天明7年(1787)、相続。 小松御城番・魚津在住・寺社奉行・若年寄を勤める。
5 矩正 (のりまさ)	寛政8年(1796)生 文久2年(1862)没	文政元年(1818)、相続。 小松御城番・寺社奉行・公事場奉行・若年寄・御家老役を勤める。
6 国規 (くにのり)	文化14年(1817)生 没年不明	文久2年(1862)、相続。 小松御城番・今石動等支配・御奏者番を勤める。
7 規遵 (つねゆき)	嘉永5年(1852)生 没年不明	明治4年(1871)、相続。

(史料16)「金府大絵図」(部分)(大1005)

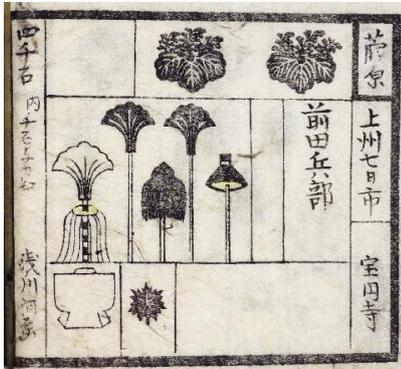
江戸後期の金沢城下図です。式部家は「前田式部」、兵部家は「兵部」、大膳家は「前田掃部」と記されています。

(史料16)

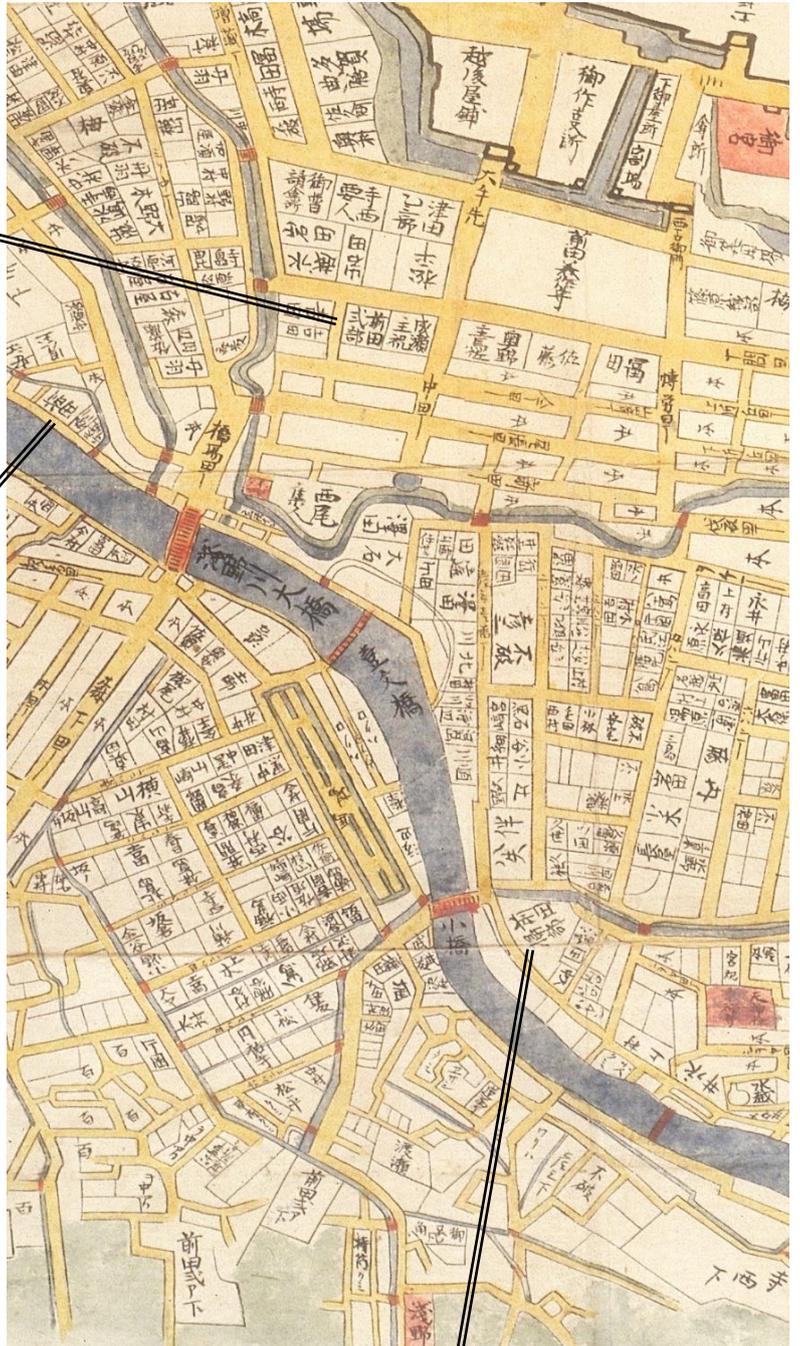
矢印部分は上屋敷箇所。



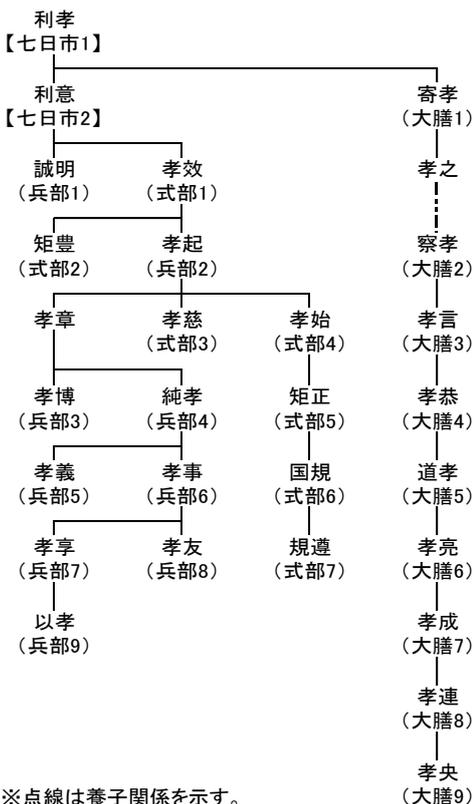
(史料17)「加賀藩年寄人持武鑑」
(前田式部家部分)(21.2-248)



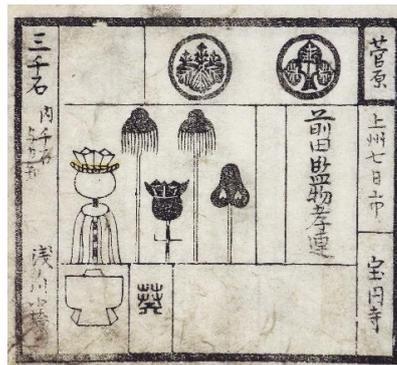
(史料17)「加賀藩年寄人持武鑑」
(前田兵部家部分)(21.2-248)



<前田大膳・兵部・式部家系図>



※点線は養子関係を示す。

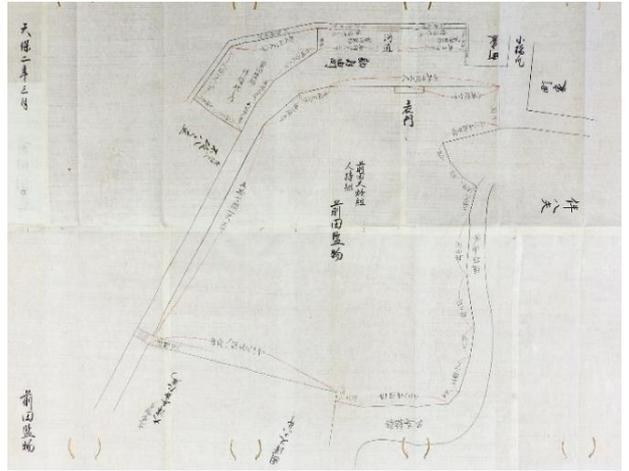


(史料17)「加賀藩年寄人持武鑑」
(前田監物家部分)(21.2-248)

(史料18)「岩根町前田監物上屋敷図」
(前田大膳家文書)

天保2年(1831)に作成。大膳家上屋敷は、岩根町(彦三町・瓢箪町・笠市町)にありました。

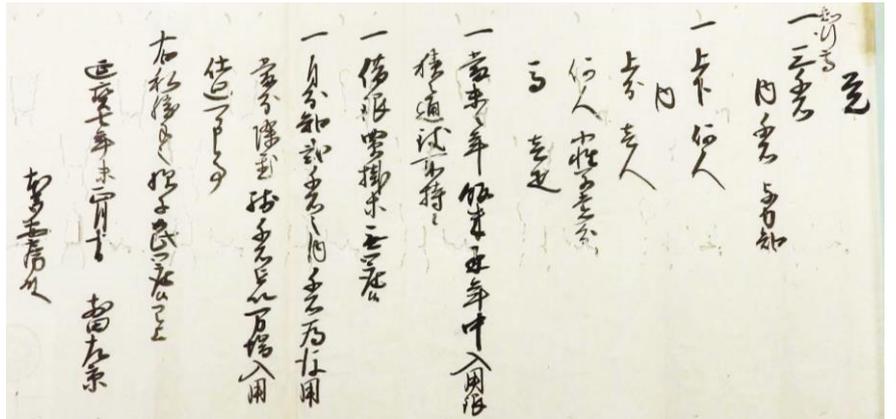
(史料18)



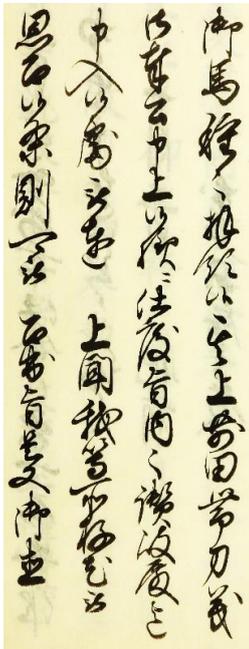
(史料19)
「前田左京勝手之様子届書」(16.36-21)

兵部家の初代誠明(のぶあきら)が加賀八家本多家に、家政報告をしたもの。誠明は、延宝7年(1679)、本多政長が支配する人持組へ属しました。

(史料19)



(史料20)

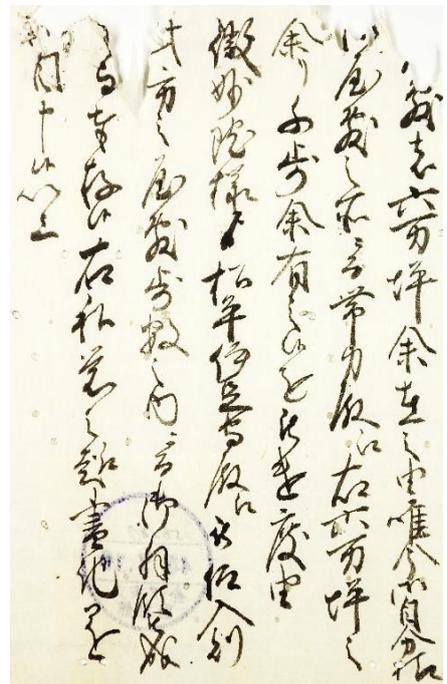


(前略)其上前田帯刀(孝矩)義、御奉公申上候様ニ仕度旨、内々讃岐(酒井忠勝)殿迄申入候処、被達上聞、我等所存尤被思召候条、则可被召出旨(後略)

(史料20)「参議公年表」1(部分)
(16.11-71)

正保3年(1646)、利常は、將軍家光から賜った御腰物の御礼のため、江戸城に登城した際、幕閣の酒井忠勝に前田孝矩(利孝の次男)の召し抱えを提案し、これにより孝矩は旗本に取り立てられました。

(前略)唯今御自分様御屋敷之所ニ而、帯刀(前田孝矩)殿江右六万坪之余り千歩余有之候を被遣度由、微妙院(前田利常)様方松平伊豆守(信綱)殿江被仰入、則此方之屋敷歩数之内ニ而御拜領被成「」与奉存候、右私覚之趣、書記懸御目申候、以上



(史料21)

(史料21)「藤田内蔵允書状控」(部分)(16.18-197)

加賀藩士の藤田安勝が、旗本の孝矩に宛てたもの。光高正室の清泰院(大姫。水戸藩主の徳川頼房の娘)は、江戸の牛込邸を綱紀に譲りたいと願っていました。しかし、清泰院が亡くなり、明暦3年(1657)の大火後に、加賀藩への伺いも無いまま、尾張徳川家に譲られました。その後、加賀藩の抗議によって、代替として下屋敷本郷邸2万坪と中屋敷駒込邸4万坪を拝領しました。左の史料では、合計6万坪の内1,000歩余は、孝矩に与えられることがわかります。これは、抗議の取次の働きを加賀藩から評価されたものと考えられます。なお、本郷邸が上屋敷となるのは、天和3年(1683)のことです。

※本パンフレットと展示史料は、異なる場合があります。